

しろや！ 広島城



浅野家の広島入国を評価する♪

1 「令和」に「元和」を考える

本年令和元年（2019）は、浅野長晟が安芸・備後8郡42万石余の領主として広島の地に入った元和5年（1619）から、ちょうど400年の節目の年にあたります。そのため、今年には「浅野氏広島城入城400年記念事業」が行われ、様々な施設や団体が数々のイベントを開催しました。

さて浅野家は、その後250年間の長きに渡り広島を治めたのですが、広島や広島城が浅野家とゆかりがあるという認識を持つ人は少なく、それまでの領主である毛利家、福島家と比べて存在感がかなり薄いように思います。

しかし、私は、浅野家は広島藩を着実に治めた、幕藩体制の鑑として存在感があることとあわせて、「都市広島」のルーツは浅野家の時代にあると考えています。地味ではありますが着実な領国経営、城下町の整備や発展などに尽くした功績は大きいものがあると思います。

それでは現在の広島の源流を探ってみましょう。



浅野長晟画像（模写） 広島城蔵

2 浅野家とは

広島藩浅野家初代長晟の父は、浅野長政です。長政は、はじめ織田信長、後に羽柴（豊臣）秀吉に仕え豊臣政権の五奉行でした。秀吉の出世とともに長政も大名へと出世し、天正11年（1583）に近江（2万石余）、天正15年（1587）若狭小浜（8万石余）、文禄2年（1593）甲斐府中（甲府・21万石余）と加増されていきました。秀吉の死去の後には、浅野家は徳川家康に従い、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦では徳川方（東軍）として戦ったことから、本家を継承した幸長（長政長男、長晟の兄）が合戦後に紀伊和歌山（37万石余）を拝領したのです。幸長は慶長18年（1613）に亡くなりますが、跡を継いだ弟（長政次男）の長晟が元和5年（1619）、安芸・備後を治めていた福島正則の改易の後に42万石余で広島に入りました。

3 なぜ浅野家が広島に来たか

浅野家がなぜ広島に来たのか、という疑問については、いくつかの見解があります。一つは、浅野家が広島入りしたことを積極的に考える立場です。それは、この加増・転封にあたって、①長晟と徳川家康の三女振姫との婚姻関係が重視された、②中国地方の要の場所にそれなりの大名を入れる必要があった、それが長晟であったという立場です。福島家と同じく、毛利家に対する牽制も期待されたとも考えられます。

もう一つは、大坂に近く、特に海上交通において



戦略上重要である紀伊に徳川家を入れるために、そこにいた浅野家が犠牲になったと考える立場です。畿内近国を徳川譜代で固めるため、代替地として広島が与えられたということです。甲斐から紀伊へ転封となった時も、論功行賞ではなく豊臣系大名を関東から遠ざけるためだったとも言われており、慶長20年(1615)、大坂夏の陣が終わった後、大坂城を幕府の直轄地とした元和5年(1619)と転封の時期も重なるからです。

しかし、私は、最初の見方を取りたいと思います。当時、まだ内乱の火種はありましたが、次第に幕藩体制が確立され始めた時代でした。そもそもこの話は、安芸・備後を治めていた福島正則が、突然改易になったことに端を発するものです。49万石分の空白地帯をどのように埋めるか、上方と九州との中間である重要な場所を細かく分割することは不可能で、幕府は福島家の旧領を治めることのできる、福島正則と同程度の石高の大名は、浅野長晟以外に考えられなかったと思います。浅野家は、後述するように、地味ではあるが着実な領国支配を長年行っており、長晟にも資質があったことと考えたと思います。時の将軍秀忠としては、豊臣系大名と関係が深かった兄の幸長であれば心を許していなかったかもしれませんが、この時は長晟の代になっていました。長晟は大坂の陣で功績を挙げたばかりであり、振姫との間に家康の外孫で嫡男である光晟が生まれていました。この絶妙のタイミングも、その決定を後押しした要因となったかもしれません。

しかし、49万石すべてでなく、安芸一国と備後8郡42万石余を浅野長晟に、備後7郡と備中の一部10万石余を譜代大名の水野勝成(福山藩)に分け与えました。右の資料は浅野家の領地を描いたものですが、そのため、福山藩領などがある右下の部分が空白となっています。



領分諸郡村々絵図 広島城蔵

4 浅野家の特徴

浅野家は、豊臣政権下で検地奉行だったことから、若狭・甲斐・紀伊に入った時に、まず領国経営の基礎として真っ先に行ったのが土地台帳の作成です。もちろん他の大名も行っていたことではあります。浅野家は領国支配の肝と考えていたようです。こうした行為は戦国時代を扱ったドラマでは絵にならないため、取り上げられることはありません。浅野家は地味で着実な領国支配を行った藩の代表格と私は考えていますが、こうした藩の下支えがあって、約250年間の盤石な幕藩体制“パックス・トクガワナ”(徳川の平和)を成し遂げられたのです。

このことを私たち学芸員の世界に置き換えると、見た目派手な研究を行うのではなく、地味な資料調査をコツコツと積み重ねた研究を行っているということだと思います。そういう方が最終的に評価を受けるべきなのですが、古今東西優秀な方々は地味すぎて注目されないのは何とも心苦しいことです。

浅野家が江戸時代を通して安定していたため、浅野家の領地である安芸・備後8郡は、一時期分家の三次藩への分知があったことを例外として捉えるのであれば、12代約250年間の間、広島の支配体制や領地と石高は全く変わりませんでした。その理由として、入国直後を除いて家臣間の大きな争いがなかったこと、多少の一揆はありましたが、大きな藩政改革がなかったことも原因かもしれません。他の藩にはあった、大きなお家騒動等の混乱がなく、浅野家は家臣団と領民をとりまとめ、ある程度無難に藩をまとめたのでしょう。

また、広島浅野家初代の長晟以降、10代目まで直系の藩主が続きました。これは本当に珍しいことで、多くの大名では、250年も続くと10代以上の藩主がいますが、分家や他家から養子を迎えることがほとんどでした。浅野家の11代、12代は9代の孫とひ孫ですので、その血統は幕末まで続いていたことになります。そのことが、広島藩を安定的に継続させたのかもしれません。

5 最後に 浅野家と広島

最後に、広島城や城下町と浅野家との関わりを見てみます。広島城は、毛利輝元が築城し、福島正則がそれを受け継ぎ、より良くなるように城と城下町を改変しました。浅野家はそれをそのまま引き継いだだけで何もしていないという評価を受けています。確かに広島城の姿は大きく変わっていませんが、それは、「武家諸法度」で城の増改築が規制された影響が大きいためだと思います。浅野家は決し

て能力がなかったのではなく、広島では改築する必要もなかったからなのです。実際浅野家は広島入国まで、和歌山、甲府、小浜、大津などで、領国経営の他に城を中心とした城下町づくりに大いなる実績を上げています。特に和歌山と甲府は後に入封した大名によって城下町が広げられていますが、城と城下町の骨組みは、浅野家治世中のものであると近年再評価されています。領国支配を着実にやることをベースとして、併せて城と城下町をセットで整備した実績が浅野家にはあるのです。

一方、広島の城下町は、広島城築城以降の都市づくりを基盤として少しずつ形成されてきており、確かにハード面は、毛利・福島期までに整備されました。しかしソフト面までは至らず、浅野長晟入城の頃までは町の活性化は十分ではありませんでした。

近世城郭には、それをとりまく城下町があります。領国支配の一方で、ここで暮らす侍や町人が活性化しないと都市は成り立ちません。幸い、広島には城下町を大動脈である西国街道が通っており、その周囲に町人町がありました。そこに多くの町人が集まり、次第に賑わいを見せて都市の中心を構成し始めたのは浅野期になってからのことです。更に富裕な町人層などが台頭したことにより、文化的にも隆盛を誇る都市となりました。このようにソフト面の整備は、浅野期であると私は考えます。

また、広島の町域は干拓によって都市が南側へと広がることで拡張していきました。それにより更なる都市の活性化へとつながっていきました。

こうして経済的にも発展した広島は、浅野期に隆盛を迎え、その後近代を経て現在、中国地方の中心都市として栄えている広島市のルーツとなったのです。浅野家でなければ、広島は発展しなかったとまではいいませんが、約250年間の広島藩浅野家の治世をもっと評価してもよいのではないのでしょうか。



浅野入国直後の絵図
(寛永年間広島城下町図・広島城蔵)

※参考文献 広島城編『浅野家がたどった城～浅野家の城と陣屋』広島城 2019

教えて広島城はかせ17 町中には今も昔の寺院がある！



□しろと：広島市内中心部には、お寺がほとんどないよね。



■はかせ：実はそんなことはないんじゃ。今から300年ほど前（江戸時代中頃）の様子を描いた絵図を見てみんさい。ここには寺があるじゃろ。①～④が寺じゃ。

□しろと：これはどの辺りなの？

■はかせ：今の市内中心部じゃ。場所は左側の橋が本安橋と書いてあるが元安橋じゃね。そこから東に向かう道が昔の西国街道、今の本通り商店街筋で★のある場所が今の本通り電停じゃ。橋の西側は今の平和公園じゃのう。黒色で塗られたのは町人の住む場所で、その北側には広島城の外堀も見える。今は、ここは相生通りじゃ。

□しろと：場所はわかったよ。昔は寺がたくさんあったんじゃね。

■はかせ：そうじゃが、実は、この①～④の寺はその場所にあったんじゃなくて、今もあるんじゃ！

□しろと：まじ？原子爆弾の影響があっても移転せんかったん？

■はかせ：そうじゃ、寺には後に移転したものもある。今の平和公園にあった寺は戦後に全部移転したんじゃが、ここにある寺は遠くに行つたらんのよ。①は二つあり、西蓮寺（北）と西向寺（南）、②は専勝寺、③は妙蓮寺、④は勝順寺で、いずれも江戸時代以前の建物は残されておらんが、ほぼ原位置を保っているんじゃぞ！

□しろと：知らなかった、本通りにショッピングに行つて、その場所を確かめてみよっと・・・



広島城下町絵図（部分・広島城蔵）

西国街道沿いにある「街道松」

江戸時代、江戸を中心に全国各地を結ぶ街道が整備され、当時来日して通行した外国人からも高く評価されています。広島藩内には、西国街道が通っており、京・大坂と九州をつなぐ大動脈として五街道の次に位置づけられて重要視されました。

こうした街道には、暑い日も寒い日も多くの旅人が通行するのですが、暑い最中の日差しや風雨を遮るものとして、道の両側に街道松として松並木が設けられました。日光街道にある松並木（栃木県日光市）などが有名です。こうした街道松は、江戸時代から150年を経過した今、その多くが道路建設などで切り倒されたり、枯れたりして、あまり残されていないのは非常に残念です。ちなみに、枯死した松の切株（西区己斐の別れの茶屋のもの）が、広島城第二層で展示されています。

しかし、数は少ないのですが、西国街道の通っていた広島市内とその周辺部にもいくつか残されているものがあります。



少し西に行った廿日市市桜尾本町には、もう少し大きい街道松が1本残っていて、こちらは廿日市市の指定史跡でもあります。

最後に、名所となった街道松として、広島市東区尾長西の「三本松」（写真右）があります。これは、文禄2年（1593）、豊臣秀吉が九州名護屋からの帰途、広島に立ち寄った際、この付近に自ら植えたものとされます。江戸時代後期には古株が三本残っていたことから、三本松と呼ばれるようになったと言われており、『芸藩通志』にも登場します。今も松を見ることができますが、残念ながら松自体は三代目です。この付近のバス停は「三本松」ですし、町内会名（三本松町内会）や銭湯の名（三本松湯）などに使用され、その名称は今も地域で愛されています。



その中の有名な松に、安芸区中野の瀬野川沿いにある、広島市の指定史跡「中野砂走の出迎えの松」（昭和49年2月18日指定）があります（写真上）。参勤交代で江戸から戻った藩主を、留守を預かった家臣がここまで出迎えたことからその名がつけられたと言われていています。現在では6本が残されています。藩主の到着を今か今かと「松わびた」ことでしょう。

その他、佐伯区楽々園、旧御筋橋の東側には、街道松が2本残されています（写真左）。そこから



（この回の担当：玉置和弘）

しろや
!
広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

令和元年12月13日発行

広島城利用案内

開館時間：9:00～18:00
（12月～2月は9:00～17:00）
入館の受付は閉館の30分前まで
入館料：大人370円（280円） 中学生以下無料
高校生相当・シニア（65歳以上）180円（100円）
（ ）内は30名以上の団体料金
休館日：12月29日～31日（臨時休館あり）
ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>

「しろや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページ（<http://www.rijo-castle.jp>）からダウンロードできます